

『グローバル天理』第7号掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言「「甘露台」事情の共時性」

本年6月26日の本部祭典中に起きた甘露台の事情から、どのように神の「かやし」の「共時性」を理解するか。筆者は、ローカルとグローバル、個と全体という相照応する二つを一つに繋ぐグローカリティの概念を、「元の理」を掘り切ることによってさらに展開せよという親神のメッセージとして受け取りたい。

太田 登・中井精一 「天理教原典とやまとことば(7)原典と表現法[2]—活用について」

動詞の活用に関するバリエーションは、時代が下るにしたがって簡略化され、近世期には四段(五段)活用・サ行変格活用・カ行変格活用・上一段活用・下一段活用の5種類に統合されていった。『おふでさき』には現代語と同じ活用の種類とともに、古い活用の種類である二段活用の残存が見られた。

笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—(7)第一章「知ること」について[2]」

天理大学の教育の根底は、「学問に無い絶対の真理」を理解、布衍するものでなければならぬ。したがって、その教育と研究に携わる者の態度・姿勢は、本教の教義が「信じられる」ように、教祖の「親の道」を手本・雛形とするところにある。

堀内みどり 「天理異文化伝道の諸相(7)天理教のコンゴ伝道[6]—神実様コンゴへ」

1962年に弟と来日したノソング氏は、天理に約4ヶ月の滞在後「神実様」を捧持して帰国した。そして、天理教は二代真柱の思いを受けてコンゴへ人材の派遣を始める。それから35年後の1998年、コンゴは内線状態に陥る。ブラザビルの教会もその被害を受けるも、多くの避難民を受け入れた。今落ち着きを取り戻しつつある中に新たな出発を迎える。

佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌(5)戦前のフィリピン伝道[3]」

明治の後半、フィリピンへ日本人が出稼ぎに行くことができたのは、日米の友好的な関係も一つの要因であると考えられる。濱口丑松、高野馬治郎の二人の布教師は、教会の系統こそ異にすれ、同じ動機と理由により日本を離れ、奇しくもマニラで出会うことになる。住まいを同じくして布教に専念する二人であったが、濱口は教祖20年祭を目前にした明治39年の旧正月、後を高野に託して帰国した。現地在住の日本人が対象ではあるが、高野の布教の成果が現れ始めた。

金子 昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—（7）思想編 宗教と経済・経営 [1]」

経済・経営に対する宗教の関係はつねに逆説的なものである。両者の緊張関係のもとで、その媒介役を果たすのは倫理という中間規定である。これがあるからこそ、宗教的見地からの経済・経営も、人間性を保持し促進させる契機を有することができる。

佐藤孝則 「エコロジーの思想と実践（7）中世ヨーロッパのエコロジー」

現代の都市が抱える廃棄物処理の問題は、中世が経験した問題と共通する部分が多い。家庭ゴミや産業廃棄物は、中世においても都市から大量に排出されていた。しかし、それらは当時すでに「循環システム」に組み込まれておらず、そのまま廃棄されていた。このシステムが機能しないかぎり、廃棄物問題の根本的解決にはつながらないはずである。「エコロジー」問題の視点で考えると、現代は中世の苦い轍を乗り越えていないことになる。

小滝 透 「天理比較神秘論への試み（7）啓示 [2]」

今回は、啓示の持つ内容を相互に比較し、その意味を問うてみた。とりわけ、外面宗教と内面宗教の違いを浮き彫りにし、さらにその内面宗教内における日本の宗教的特徴を検討してみた。次回からは、両者の比較を今一步すすめてみるつもりである。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（7） 「同調」する「からだ」」

共感や理解とは、動きや言葉を交わし合う両者の体に生起する具体的出来事に結びついている。例えば、話し手の音声と体の動きは同調しており、また聞き手の体も話し手の音声変化に同期しているという研究がある。したがって、相互に共振し合う

体を持つことが相互理解の基盤である。共同体が成立するためには、共生 の条件が具体的身体レベルで確保されていなければならない。

金子珠理 「ジェンダー・女性学情報（7）「ネイティヴ」のトポス [2]」

今回はネイティヴと同義で使用される「サバルタン」という言葉の概念史をガヤリト・スピヴァクの介入と絡めて整理するとともに、スピヴァクが「サバルタンは語るることができるか」において示したネイティヴの声の有り方を探る。

深川治道 「エコロジカル インタビュー」（7）環境マネジメントシステムと大学 [7]

早稲田大学西早稲田キャンパスは 2000 年6月2日に環境マネジメントシステム規格 ISO14001 の認証を取得した。これは日本の教育機関として5例目、大学として4例目に当たる。ここではこの認証取得に至るまでを概観する。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（7）生殖臓器の移植」

人間の胚、命の始まりそれは既に人間ではないだろうか。それが医療材料の対象となる事に居心地の悪さを感じる。人の命を救う筈の技術が命の流れを変えて行く。

小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け（7）賭けと教育」

青 少年が賭けを始めとして一般にリスクと考えられるものに近づかないようにすること(安全地帯への囲い込み)が教育的なのか、それとも適度にリスクな場面 と接しながら、それと上手に付き合ったり、あるいは回避する方法を学ばせる方が望ましいのか、意見が分かれるところである。人間は近代社会を必然化しよう と努力してきたが、人間や人間の人工物である社会は偶然的存在を免れない。偶然性の意味を教えること、すなわち「賭けの教育」の真髓がここにあるように思われる。単にギャンブルの深みにはまらないための「免疫」形成作用を超えて、賭けが生や社会における偶然性の接し方や楽しみ方を自然に教えてくれる教育的 働きを、そこに期待できるのではのではないだろうか。

上杉武夫 「都市の再生に向けて—アメリカ通信（7）都市化と天理教」

天理教は名もない片田舎に生まれ、ごく普通の農耕生活との深い関わり合いの中から陽気ぐらしの教えが説き明かされた。このことは天理教の独自性であると同時に、これからの都市生活を支えるコンセプトの原典になりうると思われる。それは、天理教が19世紀の半ば、産業革命後の近代化と産業社会に向けて発信されたものと考えられるからだ。